

トラック 301：コモロ移民 A 氏，B 氏及び C 氏への聞き取り（パリ郊外ボンディー）

A 氏：彼がここに来るのは自由だし，もう引退しているからあちこち旅行している。日本にも行くんじゃないかな。シナリオを作れば彼は準備するだろう。彼を日本に招待すれば，それもカセットテープや何やかやと一緒に。というのも彼には他に方法がないからそれがいいだろうと思う。彼は娘に全部あげてしまった。彼女が結婚した時にすべて，車まであげてしまったんだ。彼は娘が婚約している時に，四輪駆動を日本に注文していた。そうでなくても彼は，この 5 月まで結婚式があれば映画は撮るし，式の司会もやるし，どんなことについても話をする事が出来る。でもこういう風に急に [インタビュアーが] 来たのが残念だよ。そうでなかったら彼は準備をして，日本に行けるだろう。シナリオがあれば映画だって撮ることも出来る。彼はアリ・ソワリヒと一緒にカナダ人のために映画を作ったこともあるんだ。だから一緒に仕事をしないかい。今日からシナリオが出来るよ。何ととっても，アリ・ソワリヒの革命の時に彼は中尉だった。言わば，コモロの歴史の中の大事件だよ。

—— ところでコモロの歴史について大まかに説明して下さいますか。

B 氏：例えば，バンバオ県には 12 人の将官がいる。そのうち 11 人がビクニで，みんなアマディーと呼ばれている。しかしバンバオの首都はマビングニだ。そして，モロニはバンバオの首都ではなくて，コモロの首都になる。それに，部族が幾つあったかを知っておかなければならない。というのもグランド・コモロ島では 9 回の戦いがあったからだ。そこで勝利した者のために色々と分配されることになる。そして，勝った二つの地域がバンバオとムブデだった。その辺りの物語について，私はすべてを知っているわけではないけれど，それについて書かれた書物を持っている。その頃は，物語やハディシ（お話）などがあった。

—— 民話や伝説などはどうですか。

B 氏：例えば，ある知人はラッキーで，彼はモロニのまともな，優れた人々の階層にいるが，彼はモロニだけが出身地というわけではない。というのも彼はイツェンドラにいた時は，イツェンドラがふさわしい場所だった。彼の父母のどちらの系統がそうだったかは私は知らないが，いずれにしても彼はバンバオ出身ということになる。

A 氏：私の父母の出自から見ると，私はモロニ，イツェンドラ，ハマハメという 3 つの王国を共有していることになる。私はこの家系を幸運だと思っていて，実際に昇進などを体験している。尤も私は建築畑や商売畑の人間で，歴史の分野ではない。でも歴史には大変興味があるし，私よりずっと年上で 95 歳まで生きた自分の父親の恩恵を受けてきた。彼はアラウィー家という帝位の直系の家系で祖母が同じだった。彼はここに来てもう 40 年になるが，ここで学んだ同じような人々に興味を持っていた。

B 氏：私はフランスに来て 43 年で，兵役もここで就いた。でも，フランスにいるコモロ人で，二重国籍を最初に持ったのは私だと思っている。私はコモロとフランスの二つのパスポートを持っている。

—— ということは、あなたがここに来たのは 1975 年になりますか？

A 氏：1975 の革命の後に彼 [B 氏] はここに直接来たんだ。

B 氏：私は革命の前にここにいたよ。

A 氏：でも彼は、休暇の時期にあっちに行って、革命を起こしたんだ！

—— 結局、あなたは何年にここに来たのですか？

B 氏：私がフランスに来たのは 1967 年だ。

A 氏：でも彼は、1975 年のアリ・ソワリヒの革命の時はコモロにいた。というのも彼はアリの親友だったからだ。

B 氏：権力の転覆のためにね。その後、革命が始まる 1975 年 8 月 3 日の前に私はコモロにいた。アリ・ソワリヒはここに来て、マルセイユで会議を行い、それから彼らは出発した。二週目に私はコモロに行って 18 日間滞在した。アリ・ソワリヒの家は、私の母の家の隣だったが、私は母を 18 日間の間見なかった。体制を転覆させたのは 8 月 3 日午前 1 時 45 分だった。8 月 18 日に私はフランスに戻ったけれど、私がコモロにいたことは誰も知らなかった。とにかく私はアリ・ソワリヒの政府側ではなかったからね。私がここに戻って来たのは神の思し召しだし、1983 年以降私はここで子供を持った。神のご加護で、長女は今では医者になったし、2 番目（長男）はパリの消防隊員だ。3 番目（次男）は電気・配管の工業学校に行っている。私はすべての子供たちに分け与えた。今、建築の工業学校に行っている 4 番目と番目がいる。さらに 12 歳の息子がいるから、彼らの母親を田舎に行かせる時に私はここに残っていなければいけないんだ。私は子供たちと一緒にいる。隣に 9 号棟があってそこに息子のアディナがいるんだ。でも今朝私に電話をしてきて、この 29 日にオーストラリアに休暇に行くと言ってきた。

A 氏：彼 [B 氏] はオーストラリアに親戚がいるんだ。それに彼の親戚が、オーストラリアに移住した最初の人たちになる。

B 氏：今では彼らも家を持っている。彼らはオーストラリアで買ったヴィラを持っているのさ。そこを通るコモロ人の航海士たちはみんな彼らの家に寄る。でも私の姉妹は今コモロにいる。彼女は二週間前にコモロに行ったんだ。

A 氏：彼にはオーストラリアにいた兄弟がいたんだけど、彼は今ここに住んでいる。

B 氏：私は娘を持ったことに今では満足している。だから、コモロに行った時には、マムードさんに「あ

あなたのお嬢さんに会いました」というつもりだ。[別の人に対して] あんたとはコモロで会うことになるね。私は5月17日に出発する。[A氏に対して] 一昨日にコモロに運ばれたマダガスカルの牛を見たかい？

A氏：いや、私は見ていない。

B氏：900頭以上の牛だよ。

A氏：900頭？

B氏：そう、おまけに雌山羊と子山羊合せて2000匹だ。大変なことになるだろう。それで思い出したのがブナシア [イブナシーヤ] のことだ。こいつは頭のいい男で、言われていることすべてが本当のことだ。例えば、ある時彼が料理を作るように言われたら、ここに火を起こして、鍋は10メートル先に置いて、食べ物が煮えるのを待っているというわけさ。しかしそこにはそれとは別の意味があって、彼が言われたことに基づいて、それを言った人が彼に嘘をついていると思うに至る。それから彼はその嘘に答えて、火をここに、鍋を向こうに置くのだ。

A氏：それはブナワシの話で、彼はとても悪賢い。嘘をつかれたら、彼は、同じく嘘で応えなければならぬと言ったんだ。それで...

B氏：そう言えば、x xさんが来月孫娘を結婚させるんじゃないか？

C氏：そうだ、来月の14日。

B氏：私は来週の土曜に、ハハヤの娘と結婚するフンブニの人の結婚式がある。その後、30日には、ナスールの姪と結婚するフランス人の結婚式がある。

C氏：二回目の投票があるね。

B氏：そうだ、私はまず投票することにするよ。

A氏：発つ前にね。

B氏：私はサルコジには反対の票だ。

C氏：そりゃそうだ、コモロ人はみんな...

B氏：一昨日には集会があった。

C 氏：そう，一昨日の集会... なんと言ってもあいつは馬鹿だから。

B 氏：私は社会党の候補者が好きではないけれど，仕方ないな。

C 氏：そいつは馬鹿だよ。

B 氏：彼は馬鹿ではない，泥棒だよ。

C 氏：今となっては，彼 [B 氏] はコモロに戻れないよ。何しろ，[こちらには] 6000 人も人間がいて，一人ひとりにいい給料をもらう権利があるんだから。彼がここで死んでもあっちには行けない。

B 氏：いや，それは同じことではないよ。